

ヒガンバナ *Lycoris radiata*

船橋市 林信子

ヒガンバナと言えば毎年、秋のお彼岸9月23日頃に突然花茎だけを延ばし、真っ赤な花を咲かせる物だと思っておりました。今年の夏は暑く花は次々にいつもより早めに咲き出すので、こうなるとヒガンバナも早く咲いてしまうのではと、ヒガンバナにあわせて観察会をと思っていたので気がかりでした。9月22日に金杉緑地(船橋市)見に行ったときにはまだ3分咲き、10月に入ってからやっと見頃を迎えました。そこでヒガンバナはどのように季節を察知し花を咲かせるのか調べてみました。

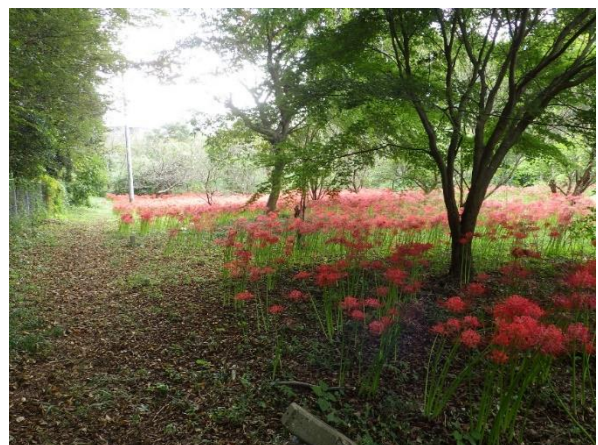


ヒガンバナは開花終了後、30~50cmの線形で深緑の艶のある細い葉(3~8枚)をロゼット状にだします。中脈沿いが白ぼくなっているのが特徴です。翌春5月中・下旬頃に葉がかれるまで地下の鱗茎に養分を蓄えます。花芽の分化・発達には葉が成育中の4月下旬に始まり、葉が枯れた後の6月中旬に雌ずいを形成、8月下旬に花粉形成し、9月の開花に備えるそうです。冬期に寒さにあわないと(最低20℃程度の温室で育てると)夏にも葉が枯れず常緑となります。このような条件では花芽は分化できません。花芽を分化させるには低温に遭遇することを必要とするようです。冬の寒さに晒されれば花芽は分化し花を咲かせる準備が出来て、4月下旬から花芽の分化が始まります。このように一度は寒さを経験することが花芽の分化には必要であり、このような性質は春化(バーナリゼーション)と呼ばれています。

また花を咲かせる時期になるとそれまで発育を促した高温(25~30℃)ではかえって発育が抑制され、花を咲かせるには20℃付近が適温とされ、今年のようにいつまでも暑いと開花の適温20℃になるまで抑制されるそうです。ヒガンバナは温度・特に地温を感じて花芽の分化や発達が進行しているとのことでした。子孫繁栄のために最適な温度をえらび、花を咲かせているなんてすごいことですね。

昨年は村上緑地(八千代市)に8月25日行きましたところ早くも花が咲いており、相談所で訪ねたところコヒガンバナとのことでした。中国原産でヒガンバナより小型花で高さ20~30センチ、花茎は赤みがかり、花は1ヶ月ほど早く咲くとのことでした。ヒガンバナは三倍体で種が出来ませんが、コヒガンバナは細胞の染色体数が基本数の二倍の二倍体で、種子ができるので種子から殖やすことができます。シロバナマンジュシャゲはこれとショウキズイセン(黄色)の自然交配種と言われています。

有毒植物としても知られていますが、成分の一つであるガランタミンはアルツハイマー病の治療薬として利用されています。(左:2020年9月25日 右:2020年10月6日 金杉緑地・船橋市)



虫こぶで三題

「こんなところにリンゴが成るはずないよね？」と声を発したのがきっかけでした。詳しい先生に尋ねると「これは虫こぶといってね！」と講義が始まりました。

樹木の葉や芽や枝に昆虫（主にハエやハチなど）が産卵し、卵が孵化し成虫になるまでの間に樹木の細胞が変化して虫こぶを作り、変わった形のものぐら下がるといいます。コナラの虫こぶはナラメリンゴフシでナラメリンゴタマバチの仕掛けたようです。

以来、虫こぶに気を取られるようになり、筑波大学グラウンドで見たラグビーの試合中、そば

に立つクヌギが気になり、近寄るとクヌギの果実そっくりのクヌギエダイガフシが見つかり、試合どころではなくなりました。その時は明治大学が強者でしたが…。

西白井のハクチョウの観察会では、公園に落ちていたイスノキの虫こぶをいくつか笛にしてみようと持ち帰りました。帰宅後、PCのそばにおいて、しばらく目を離したすきに、虫こぶの穴の中からウジョ・ウジョと羽の生えたアリさんが出てきているではありませんか。叫びたくなる感情を抑えて、家族に悟られないように、そっと家の外に出して、どこかに飛んで行ってもらいました。次の観察会でその事件を話すと、「あるある」というではありませんか。共感と笑いで背中を吹き飛ばしたのを覚えています。

（松戸市 藤田 隆）



コロナ禍の田舎暮らし

田舎は人が少ない。どこに行っても混雑しているところがない。だから普段どおり街へ出かける時はいつものペースで「ついでに自然観察ウォーク」だ。すれ違う人はほとんどいない。マスクは店に入る時のためにバッグに。

林縁の道はいつ歩いても季節の発見がいっぱいだ。樹上から3m以上も垂れ下がったヤマノイモのツルを見つけた。全ての葉がイチョウの黄色。階段わきの草刈り跡はミズヒキの赤い花壇になっていた。落ち葉に混じってヤマグリやスタジイの実が落ちている。去年より少ないな。草むらに瑠璃色のノブドウの実がたくさん！やっぱり歩いてよかった。街中へ続く作田川沿いの道を歩く。かつては大雨でよく氾濫したが洪水対策で川幅が倍になり遊歩道も整備された。浅瀬ができて鳥も随分多くなったと思う。秋冬にはオオバンやコガモ、カルガモ、コサギ、アオサギなどが見られる。今日はカイツブリが一羽、川の真ん中で何度も潜っている。橋の下をのぞいたらキラリと青く光る背を見せてカワセミが飛んだ。

帰りはちょっと別の道へ。満開のキツタの花にブンブンと何か来ている。アブかなと思ったら小型のスズメバチがたくさん飛び回っていた。近づくのは怖いので早々に観察を切り上げて家に帰った。

（山武市 金子美幸）



○コロナ禍の植物観察は

新型コロナウイルスは収束する気配がないまま、とうとう秋になってしまいました。

春は近くをあちこち散歩して、キッコウハグマの群生している場所に出会ったり、観音堂の斜面に〇〇タツナミソウ（オカタツナミソウ?）を見つけたり身近な場所で意外な発見ができました。

なかなか遠くまで植物観察に出かけることができませんでしたが、1年ぶりに先日筑波実験植物園に行ってきました。

Go to travel 効果か、雨続きのなかで久しぶりの秋晴れに誘われてか結構な人出でした。

正式には国立科学博物館筑波実験植物園、敷地 14ha に日本国内外の植物 5,000 種が植えられており、見ごたえがありました。見ごろ植物のパンフレットがあり、園内植物には名札と説明文もあり一人で歩いても楽しめる植物園です。

この日は植物仲間 4 人で開花リストを参考に歩きましたが、私が感激したのはジンジソウ。ちょうど見ごろの開花で、雑木林を抜けた先の小流れ脇に多数の小さな白い花を咲かせている姿は何とも清楚でけなげでした。

そして、絶滅危惧Ⅱ類（VU）のミズトラノオも水辺に咲いていました。ミセバヤのピンクの花も初めて見ました。タイワンホトトギス、キイジョウロウホトトギス（VU）、サラシナショウマも見事でした。

午後はサバンナ温室、熱帯資源植物温室、熱帯雨林温室を巡り、夜開花して朝にはしぼんでしまうというサガリバナの花を水盤に浮かべてあるのを見たり、ムカゴコンニャクの珍しい花にも出会えました。

また、野外ではイイギリの赤い実が秋晴れの空に生えて見事でしたし、ナワシログミのクリーム色の花を初めてみました。苗代をつくる初夏のころ実がなるには秋に花が咲くのですね。

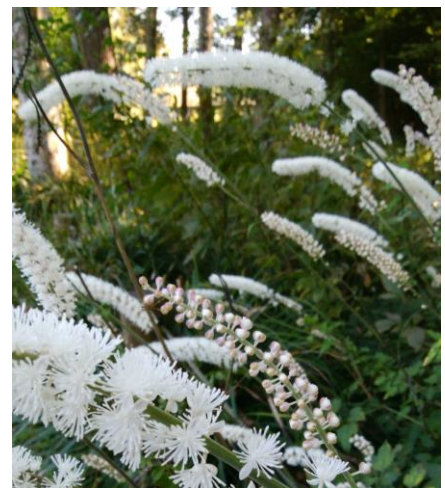
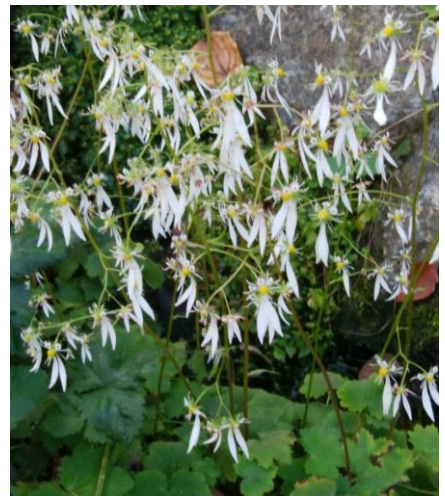
秋の一日まだまだ見たい植物はありましたが、楽しみを先に残して三密を避けて帰宅しました。



植物観察に出かけるときには、学生の頃買った「牧野日本植物図鑑（学生版）」を持ち歩きます。見た植物のページに日付と場所を書き込みます。おおかたは最近 10 年の記載ですが、昭和 47.6.11 北八ツ高見石オサバグサ、8.26 安達太良山イワセントウソウ、シオガマギクなどと書いてあるのを見ると若かった頃の楽しい山行を思い出します。今やこの図鑑は植物検索だけでなく、あちこちで出会った人や出来事までも思い出させてくれるかけがえのない思い出図鑑となっています。牧野学生版を片手にあちこち出かけたいですね。

心おきなく植物観察に人々が集まれる日の一日も早いことを願ってやみません。（EIKO 記）

（千葉市 長江英子）

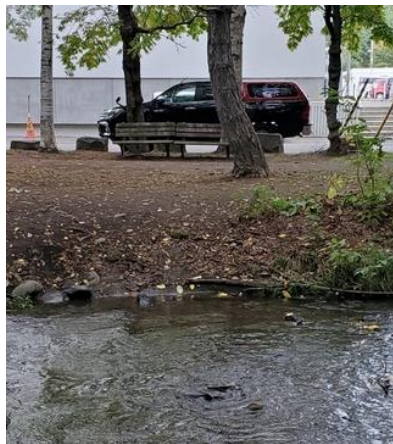


北の国だより

札幌市にそびえる手稲山（標高1023m）において、10月15日、初冠雪が観測されました。自然界の動物たちも植物たちも、冬の準備を着々と進め、冬ごもりに入りつつあります。北海道では、いよいよ長くて寒い冬の訪れを迎えようとしています。（佐野由輝）

200万都市のど真ん中でサケが！

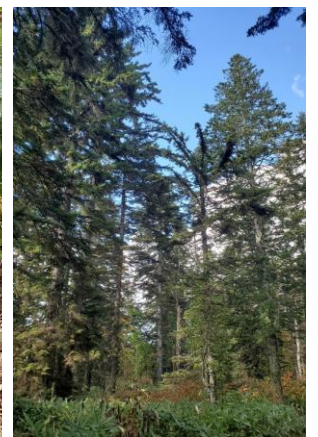
10月4日、札幌市に流れる精進川に、たくさんのサクラマスが遡上していました。婚姻色の衣装を身にまとい、産卵場所を求めて、賢明に泳いでいました。200万都市である札幌の市街地のど真ん中を流れる小さな川で、普通にサケ類が見られるなんて、さすが、北海道ですね。サクラマスが競って上っている向こうには自動車が普通に走っています。人の生活と大自然が隣接している札幌、いつまでも、今の環境を残していきたいですね。



アカエゾマツは地域全体で子育て

北北海道にある北海道大学雨龍研究林です。この研究林では、天然林施業に関する研究が行われているのですが、その中で、アカエゾマツを主体とする原生的な天然林で、稚樹の調査をしたところ、95%が倒木更新由来だったそうです。

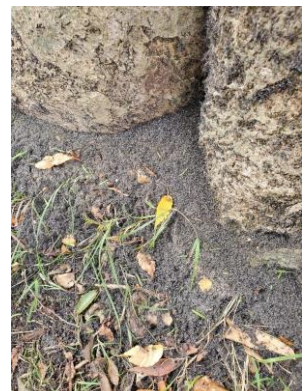
倒れた木の上に見える木は、倒れた木の子どもではなく、他人の子どもです。つまり、アカエゾマツは、自らの体をゆりかごにして、血のつながっていない地域の子どもたちを育てていることになります。そうやって、森林は世代交代をしている。考えさせられますね。



雪虫が冬の到来を告げにやってきました

10月に入り、北海道の冬の風物詩である雪虫が舞う季節となりました。札幌市内で見かける雪虫には、主にトドノネオオワタムシとケヤキヒトスジワタムシがあるのですが、トドノネオオワタムシはトドマツとハルニレを、ケヤキヒトスジワタムシはケヤキとササ類を行き来しながら繁殖します。

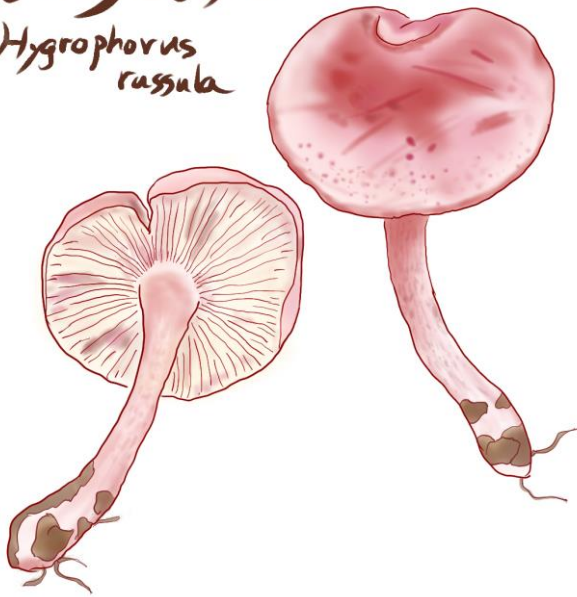
写真は、ケヤキの根元の様子ですが、砂の粒のように見えるのがケヤキヒトスジワタムシです。まさに、吹き溜まりですね。この虫たちが空を舞っている様子を雪に見立てたわけですね。しかし、雪も雪虫もちらほら降っている間は情緒深いのですが、吹雪（大量発生）になるとうんざりします。



樹木とキノコのスケッチ～描いて発見する自然のすばらしさ～（中田真也子）

さくらしめじ

*Hygrophorus
russula*



<サクラシメジ>

君津の千年の森をつくる会のキノコ観察会に参加しました。ちょうど初秋のキノコと秋のキノコの入れ替わりの時期。初秋に多いイグチやテングタケの仲間が少なくなっていました。まだコウタケは出ていませんでした。でも今回ピンク色のきれいなサクラシメジが多く見ることが出来て参加した甲斐がありました！！

家に帰ってサクラシメジの絵を描きました。

改めて、そのきれいな色を見ながら、キノコは不思議だらけなんだと思いました。

植物の花や実の鮮やかな色は、だいたい虫や鳥、動物を呼ぶためということ説明はつくものが多い。でもキノコの鮮やかな色は何のために？

キノコを知れば知るほど、生き物は分からないこと山ほどあって、とても人間如きに全て解明できるものではない、ということをおぼろげに感じています。

2020年10月12日 君津市豊英島

<イヌマキ>

イヌマキの実がなる季節になりました！すっごく変な形の実ですが、赤くなる部分美味しいですよ。幕張海浜公園の観察会で「イヌマキはこうみえて針葉樹なんですよー。」と紹介したところ、どよめきが起こっていました。

最近読んだ「名人庭師とっておきの知恵袋」という本に「マキは、植木の五木と呼ばれる木の一つ。刈込んでも老木になっても美しく植木の王者とも言える。」と紹介されていました。

植木として高値で取引されたマキは房総半島の砂地で育てられ、その後埼玉県の大宮へ運ばれ養生してから出荷したのだとも書かれていました。

イヌマキが千葉県の大宮である理由が理解できました。

今は都会ぐらしの人の多くがマンションぐらし。庭は少なくなりました。でもマンションの敷地の生垣でも美しく青々としているイヌマキは、私たちにとってかわりなく身近な木です。2020年10月22日 千葉市美浜区

いぬまき

Podocarpus macrophyllus

